

Frente



三重県男女共同参画センター
フレンテみえ
フレンテとはスペイン語で
「前向き」という意味です。

2023.6
vol.93

特集

- 不定期連載
フレンティが聞く!みえのひとびと
丹羽玲央菜さん
(伊勢工業高校 建築科 2年)
- エッセイ
山崎ナオコーラさん(作家)
「わからないままでページをめくる」
第1回「理解しなくてもわりと平気」

事業報告

- 男女共同参画フォーラム ～みえの男女2023～
ひと
- 私もあなたも楽になる
オトナ女子のからだを大切に方法

事業案内

- パートナーときく“更年期”
～CHANGE of LIFEのススメ～
- フォーカスみえ
女子マンガから学ぶ
セルフラブ(ご自愛)のススメ
- アソボ・マナボ・タノシソウブン
「ちがい」にOK!
ドラァグ・クイーン・ストーリー・アワー

自分を信じて生きていく

特集!

池田理代子講演会

『ベルサイユのばら』と私の人生





『ベルサイユのばら』と私の人生

毎年春に開催しているフレンテみえのファンファーレ事業。今年度は社会現象にもなった『ベルサイユのばら』を描いた池田理代子さんを講師に迎え、『ベルサイユのばら』について、また池田さんのこれまでの人生などをたっぷりとお話しいただきました。

マンガ・アニメをジェンダーの観点から研究されている、横浜国立大学教授の須川亜紀子さんに聞き手を務めていただき、男女共同参画について一緒に考えました。

今回の情報誌では、その一部をご紹介します！



池田 皆様こんにちは。本当にたくさんの方がおいでくださって嬉しく思っております。

今日のタイトルが『ベルサイユのばら』と私の人生』となっておりますが、「男女共同参画」のお話です。そのあたりをみなさんに考えていただいてお帰りいただけると嬉しく思います。

須川 みなさん、こんにちは。横浜国立大学の須川と申します。皆さんもうお待ちかねだと思いますので、早速池田先生にいろいろお伺いしたいと思います。

まずは1972年に執筆された『ベルサイユのばら』について、お伺いします。この作品はマリー・アントワネットの物語を描きたくてご執筆されたとお聞きしましたが、当時1960年代から70年代にかけて、学生運動、ベトナム戦争、そしてウーマンリブ運動が盛んな頃でございました。その頃先生は20代でしたが、どんなきっかけや想いでご執筆されたのでしょうか。

池田 まず私は18歳の時に、高校3年生でどうしても大学に行きたいということを父に申しましたら、「女に学問はいらない」と言われました。まだ、本当にそういう時代だったんですね。私の友人で学校の成績も高校の成績もとても優秀な友人がいましたが、高校3年生の3学期にお見合いをして、卒業と同時に結婚するような時代でございました。本当に古い時代だったんですけれども、私は学問はいらないと言われても学びたいという思いがあって親を説得したんですが、その時父が出した条件というのがすごいんですよ。まず一つは国立大学であること、それから浪人は許さない、さらに学費は1年しか出さない。この3つを条件として出されました。そのため、2年生の時から私は自分で学費を稼いで大学に行かなくてはならなかったんです。

ところが私は当時、人前に出るのがとても苦手だったので、なんとか人に会わないでできる仕事はないだろうかと考えまして、最終的にたどり着いたのが漫画家という仕事だったわけです。

須川 それでマリー・アントワネットの小説をお読みになって、これを描きたいという想いを持たれたんですね？

池田 そうですね。マリー・アントワネットについては、高校2年生の時の夏休みの宿題で読書感想文を書くという課題がありまして、何冊かあった課題図書の中にシュテファン・ツヴァイクの『マリー・アントワネット』という本がありました。それを読んで本当に感動しました。

フランス革命が起こって彼女はとらわれの身になって、やがて処刑されるわけですがそれでもシュテファン・ツヴァイクの作品の中で私が一番感銘を受けたのは、あんなに無邪気で遊び好きで可愛らしかった王女様が、大変な苦難の中に投げ込まれてやっと自分の人間としての価値みたいなものを発見して素晴らしい女性になっていくんですね。無邪気な少女から自分の人間としての存在価値みたいなものに目覚めていく過程にとっても感動いたしました。それでこの人の人生をいつか描いてみたいという気持ちで『ベルサイユのばら』を描きました。

須川 非常に激動の時代を強く生きた女性としてマリー・アントワネットという人物がいたということですね。もう一人のとても重要な登場人物であるオスカルについても、マリー・アントワネットを描く際に非常に重要なポジションであったとお伺しております。

オスカルは男装の女性ですが、男性中心社会でありながら、男性として生きていくというのは、日本の当時の70年代の社会と通じるところがあると思うんですけれども、池田先生が心がけていらっしゃることはどういったことだったのでしょうか。

池田 オスカルはマリー・アントワネットの対局にある人物として描きました。オスカルはもちろん私の想像上の人物です。

マリー・アントワネットも自分の意志ではなく、略略結婚の道具としてフランスに嫁がされました。オスカルも自分の意志ではなく、ジャルジェ家という王室を守る軍人の家柄の跡継ぎにするために男として育てられました。

マリイ・アントワネットもそうですがオスカルも年を重ねるにつれて、自分の人間としての存在というものに思いが至っていくわけです。それぞれアントワネットはフランス革命に、オスカルはフランス衛兵隊という実在する軍隊に出会います。

1789年の7月14日に民衆がバスティユ牢獄を襲います。そのときにフランス衛兵隊が民衆の味方に回り、民衆に兵器の使い方などを教えてあげて攻撃を手伝って、最終的にバスティユが落ちるわけです。私はそのフランス衛兵隊の隊長さんにとっても興味を持ちまして、絶対この人を描きたいなと思ったんです。でも当時私はまだ24歳でしたから、兵隊さんが普段どんな生活をしているのか、朝起きてどんな風にいるのか、やっぱり最初に髭剃るのかな、とかつまらないことをずっと考えているうちに、これはちょっと男性としては描けないなと思ひまして女性にしたという次第です。

須川 そうだったんですね。オスカルもアントワネットの他にも政略結婚という意味では本編の中にポリニャック夫人の娘であるシャルロットというキャラクターが出てきます。彼女は政略結婚が嫌で悲惨な最期を遂げています。こういった自分の思い通りにならないという女性の人生、これって現代の女性にも通じることだと思うんですけども、その点を池田先生はどのようにお考えでしょうか。

池田 そこは男性と女性の生き方みたいなことを意識して描いたわけではないんです。どちらかというとフランス革命の時代はむしろ文化的には女性の方がとても優れていたんですね。けれどあの時代には「どんな天才も女に生まれればいないと同じ」という言葉もありました。女性はまず父親の言う通りに生きて、そして政略結婚をして、嫁いでは夫の言う通りに生きる。そういう生き方がごく普通だったわけですね。そういう時代の中でそういう人だけを描いているのではつまらないだろうと思ひまして、オスカルは特に軍隊に入ってから、そしてやっぱり私が描いていたよりもずっとずっと、毎日のように「女のくせに」って罵られていたはずだと思います。そのために彼女がしたことは、やっぱり男性に引けを取らない実力をつけることだということで、軍人としてとても強い人になっていきました。そういった生き方が1970年代の社会に出て働いている女性たちの心をとても打ったんじゃないかと思うんですね。

須川 1970年代はまだ男女雇用機会均等法もなかった時代です。1980年代にやっと法律はできましたけど社会全体は変わっておらず、逆に管理職に就いた女性がまた新たな困難に立ち向かうことになるという時代を経て1990~2000年代になって男女共同参画社会基本法という法律ができました。働くこと、結婚すること、子どもを産むこと、そういったフェーズに乗り越えなければいけない何かがあるというのが『ベルサイユのばら』にも通ずることなのかなと思いますね。

池田 そうですよ。だから50年経っても世の中はそんなに劇的には変わっていないんだなと。働く女性は増えましたけれども働く女性を取り巻く環境っていうのはそんなに変わっていないというのが実感としてあります。

須川 また実は池田先生は男女の問題に関する作品だけではなく、ジェンダー規範そのものに対して考えさせられるような作品と

いうのを非常に早くから描かれていらっしゃると思います。例えば『クローディーヌ…!』という作品。皆さんもお読みになったことがあるかもしれませんが、女性として生まれながら女性を愛してしまうというキャラクターですよ。

池田 そうです。小さい時から自分は女ではなく男だと思うという風に思ってしまった、そのために親が「うちの娘はおかしくなった」と精神科に自分の娘を連れていくのです。これは実はフランス人の実在の人物なんですよ。時代的にもそういったことがあんまり社会に受け入れられる時代ではなかったために最終的には自殺してしまうんですけども、そういった実在の方の話を描いたんです。何と言っても50年前ですから。まだLGBTQというような言葉も全然なくて、どうも私は何か感性だけは鋭いけれども何でも早すぎたんだなっていうことを思ったりしていますね。

須川 LGBTQの方々は今でこそ池田先生がおっしゃったように、言葉もできましたし用語もよく聞くようになりました。けれども、まだまだそういったことに対して「どこにいるんだろう」とか「そういった人たちがどのように考えてるんだろう」というように身近に感じられる機会がないことが多いかと思うんですね。そういう意味でも先生が描く作品は、ジェンダー規範の壁にぶつかる、男女の二分法みたいなものに対して違和感を訴えるようなテーマがあり、特に女性やマイノリティである方々に響くんじゃないかなと思っています。

池田 それから男女共同参画といいますがどうしても女性は外に出て働かないといけなかなって思われる方も多いんじゃないかと思うんですけども、私は専業主婦というあり方もとても立派な素晴らしい生き方だと思っております。自分の母がやっぱり専業主婦だったんですね。本当にプロフェッショナルな専業主婦でした。母がいたからこそ私はいろんな意味で自分の感性を養うことができた。だからプロフェッショナルな専業主婦であるということは、決して恥じるべきことでも何でもありません。必ず外に出て働かなければいけないわけではないんだ、というのが私の持論なんですよ。やっぱり子どもを育てるという仕事っていうのは、本当に素晴らしくて大変なことだと思います。だからこそ、その時の自分の希望に合わせて生き方を選べるのが大切なのではないでしょうか？



男女共同参画フォーラム ～みえの男女2023～ いまのわたし、ひとまず上出来

開催日

3月4日

土

3月8日の「国際女性デー」によせて、自分の生き方を考える日にと毎年開催している、男女共同参画フォーラム。今年は「いまのわたし、ひとまず上出来」と題して、ホールイベントはコラムニスト・ラジオパーソナリティのジェーン・スーさんをゲストにお迎えしました。受付開始後なんと1日で定員に達したため、急遽大きな会場に変更して開催。4つの分科会、団体や企業の展示も併せて延べ750名を超える皆さまにご参加いただきました。

ジェーン・スーさんの講話では、更年期は“更新期”“自分の棚卸し時期”と前向きに捉える、若いころに思い描いていた“普通”の生き方はもう“幸せの定型”ではない、といった身近なことを軽やかに楽しくお話くださいました。また、時代の変容に伴って家族や男女のあり方も変わり、男も女も変わらないと無理が出てしまいます。だから、「女らしくない」「男らしくない」ことに起因する悩みを「自分のせい」だと思いはもうやめよう！とエールをいただき、「私らしさ」を見つけるには“練習”が必要と、具体的な提案もありました。後半は、参加者からの質問にたっぷり応えていただき、満席の客席が一体となって考える、濃密な時間となりました。

大人だって完ぺきではありません。傷つきます。「つらい」「さみしい」「しんどい」はどんどん口に出して良いけれど、それに支配されてしまうのはもうやめて。情緒不安定は感情的な映画に浸る絶好の機会♪と楽しみにかえていきましょう。これからの人生を軽やかに生き抜くための最重要事項は「アップデート！」新しい価値観は、新しいテクノロジーに宿ります。恐れずにやってみて。

「私らしさ」を見つけるのに役立つ練習

- NOと言う練習
- できなくても気にしない練習
- 変わることを恐れない練習
- できると信じる練習
- 断罪しない練習
- 未来を怖がらない練習



わたしたちの〈もやもや〉を考える

私もあなたも楽になる オトナ女子のからだを楽にする方法

開催日

1月8日

日祝

婦人科診療をしながら、女性の心や体の悩みに寄り添うメッセージや情報発信をし続けている産婦人科医高尾美穂さんをお招きし、参加者から事前に寄せられた女性のからだに関する「もやもや」についてお答えいただきました。その中からすぐに出来そうなもやもや解消術を紹介します。



～女性特有のからだの「不調」は我慢するものではなく対処する時代～

「生理や更年期など女性のからだに起こる様々な症状で、困っているのであればそれは対策すべきこと。婦人科受診をし、治療をすることで他の病気のリスクを減らすことができ、今後の人生にも関わってくる。」

～更年期はあえて積極的なリラックスを～

「更年期は女性ホルモンの減少とともにリラックスがしづらくなるので、積極的にリラックスする時間をつくる。リラックスできる音楽や、ヨガ、アロマ、ゆったりとした呼吸など自分がリラックスできる方法をいくつかもっておくのがいいよ。」

などなど、たくさんのエビデンスに基づいた情報とともに更年期の自分にできる先生からの温かなメッセージを時間いっぱいお話いただきました。

事業予告

7/22

男性講座

パートナーときく“更年期”～CHANGE of LIFEのススメ～

更年期は女性にだけ訪れるものではありません。

最近関心が高まりつつある「男性更年期」は、男性自身が自分で気付くことが難しいといわれ、気付いても「自分はまだまだ!」と無理を続けてしまうこともあるため、周囲の理解とサポートがとても大切です。

更年期は英語で『CHANGE of LIFE』。この講座で、自身のことだけでなく、男性も女性の、女性も男性の更年期について楽しく学びながら、“新たな人生”に向けてお互いを支えあえるパートナーシップを深めませんか。

プレ更年期世代、大歓迎!体調管理に役立つかんたんエクササイズ(体操)も行います!

ぜひご夫婦、カップル、ご友人など。パートナーとご一緒にご参加ください!



日時 7月22日(土)
13:30~15:30

参加無料

会場 三重県総合文化センター内
三重県男女共同参画センター
「フレんてみえ」1階 多目的ホール
対象 テーマに関心のある男性と、
その方のパートナー(性別等不問)
※男性1名様でもお申込みいただけます。
女性のみでのお申込みはご遠慮ください
定員 100名程度(先着順)
講師 田村 佳代さん
(更年期トータルケアインストラクター/
NPO法人ちえぶら事務局長)
託児 あり 要事前申込 1歳6ヶ月~小学3年生程度
子ども一人につき500円
託児申込締切 7月8日(土)
共催 レディオキューブFM三重

8/5

アソボ・マナボ・タノシソウブン

「ちがい」にOK!ドラッグクイーン・ストーリー・アワー

皆さんは「ドラッグクイーン」を知っていますか?「ドラッグクイーン」は派手なメイクやドレスなどを身にまとい、男女の線引きを飛び越えてパフォーマンスをする人たちのこと。こんなに派手なメイクやきらびやかな服って変?いえいえ、そんなことはありません。自分の「スキ」は誰もが違って当然。そこに性別による違いなんてありません。自分らしくきらきら輝くドラッグクイーンによる絵本の読み聞かせやハグたいそうをしながら、一緒に楽しく遊びましょう!みんなも自分だけの「スキ」が見つかるかも!ぜひ保護者の方と一緒にご参加ください。



©Tsumumi Yano

日時 8月5日(土)
①11:00~12:00
②14:00~15:00

参加無料

会場 三重県総合文化センター内
三重県男女共同参画センター
「フレんてみえ」1階 多目的ホール
対象 ①3歳~5歳の子どもとその保護者
②6歳~8歳の子どもとその保護者
定員 各回20組
講師 マダム ボンジュール・ジャンジさん
(ドラッグ・クイーン・ストーリーアワー東京)

9/2

フォーカスみえ

女子マンガから学ぶセルフラブ(ご自愛)のススメ

性別を問わず多くの人の心に刺さる作品も多い女子マンガの世界。皆さんはそんな女子マンガに登場するキャラクターといえばどんなキャラクターをイメージしますか?女子マンガに登場するのはキラキラのプリンセスや絶世の美女ばかりではありません。見た目に悩んだり、人目を気にしたり、誰かの一言に傷ついたり...そんなコンプレックスを抱えて生きているキャラクターもたくさんいます。

今回の講座では、ライター・マンガ研究者として様々なメディアで活躍されているトミヤマユキコさんを講師に迎え、女子マンガの中にいる彼女たちを通して、それぞれの中にある「ルッキズム」にフォーカスし、自分を大切にする「セルフラブ」な生き方について考えていきます。



日時 9月2日(土)
13:30~15:00

参加無料

会場 三重県総合文化センター内
三重県文化会館1階 レセプションルーム
対象 テーマに関心のある方
定員 50名
講師 トミヤマユキコさん
(ライター/マンガ研究者/
東北芸術工科大学文芸学科准教授)
託児 あり 要事前申込
1歳6ヶ月~小学3年生程度
子ども一人につき500円
託児申込締切 8月19日(土)



不定期連載
インタビュー
フレンティが
聞く!

みえの 第11回 ひとびと

丹羽 玲央菜さん (三重県立伊勢工業高等学校 建築科2年)

丹羽玲央菜さんが通う、三重県立伊勢工業高等学校は、普通科目に加え、工業科目をバランスよく勉強することができ、将来のスペシャリストとしての教養や専門性の基本を身につける生徒の育成を目的としている工業系の高校です。丹羽さんは、1年生の時に、第68回工高生デザインコンクール(日本建築協会主催)で最優秀賞を受賞されました。建築科を志された経緯や受賞作品について、受賞作品が展示されている鳥羽市立海の博物館にてお話を伺いました。



進路として建築科を選んだ経緯や学校生活について教えてください。

私は小学生の時にテレビで家のリフォームをする番組を見て、「やってみたい」、「自分も家を造りたい」という希望を持ちました。家を建てる大工さんというよりは、自分の思い描く家を設計したいという気持ちがありました。高校進学時に普通科に進むのか、建築について学べる工業高校かで悩みました。オープンスクールで、1年生の時点から設計の基礎となるレタリング検定を受けることを知ったり、高校生の模型作品などを見たりして、早くから専門性が学びたいという思いが強くなり、伊勢工業高校を受験しました。父も母も私の希望を叶えるために応援してくれました。

私の学年の建築科では38人中女子生徒は10人と少なく、男の子が多いので友人ができるのかなとちょっと不安な面はありましたが、全く心配するようなことはないし、女性の先生や養護教諭の先生もいらっしやるのでほっとします。私はとにかく設計について授業外でも学びたいと思い、建築研究部に入り、週6日活動しています。授業では受けていない専門的な製図についても学んだりしています。

1年生の時に応募したデザインコンクールで最優秀賞を受賞されたとうかがいました。

そうなんです。最優秀賞という輝かしい結果について自分自身が一番びっくりしています。6月にテーマ「私のまちの『学び』ステーション」が発表され、そこからアイデアを考え、9月末に仕上げました。

まず、自分が育ったまちで何が学べるか考えました。父が漁師をしているので、自分が幼い頃、父や海から学んだことをこれからの子どもたちにも学んでほしいと思いました。更に、設計図を作るために伊勢湾近海で獲れる魚の種類だったり、魚のさばき方だったり、どんな海の状態なら船を出することができるのかとか、父の仕事の様子も見たり聞いたりしながら設計を始めました。

そして子どもたちが漁師さんと交流できる場所や、魚をじかに見ることができいけすを設けたり、魚をさばく体験ができたり、船を間近で見たりできる学びステーションというスペースを設計するなど、あちこちに自分の思いや工夫をちりばめました。

設計時には、図面の描き方、模型づくりも初めてで、わからないことだらけで、先輩や先生方にもたくさんアドバイスをいただきましたし、家族にも協力してもらいました。

受賞して、たくさんの方々喜びの声を届けてくださいました。中学校の同級生からも「新聞見たよ」とメールや電話があり、うれしく思ったのと同時に、本当に助けてくださった多くの方々に感謝です。

これからの目標や、いま進路について考えている後輩の皆さんにメッセージをお願いします。

卒業までには時間があるので進路はこれから決めていくつもりですが、私は人とかかわることが好きなので、この建築科で学んだことを生かして、人とコミュニケーションを図れる仕事に就きたいと思っています。また、自分の住む家は、自分で設計したいという希望もあります。工業高校に入ることに少し抵抗はありましたが、入学して性別に関係なく友達できていきました。また、「建築」って難しいとか堅苦しいというイメージがあるかもしれませんが、先生方が丁寧に説明してくださいます。

私は工業高校に入り、早い段階から自分の勉強したい建築のことに取り組めたので良かったです。工業高校に来て良かったことは沢山あります。中学生の皆さんも、自分の希望する道を見つけて、それに向かって全力で進んでほしいと思います。



三重県立伊勢工業高等学校 〒516-0017 三重県伊勢市神久2丁目7番18号 TEL 0596-23-2234 FAX 0596-23-2236



今号の情報誌Frenteから新しくエッセイコーナーが始まります。エッセイを執筆して下さるのは『人のセックスを笑うな』『母ではなくて、親になる』など様々な作品を執筆された、作家の山崎ナオコーラさん。
全4回のエッセイをとおして、山崎さんと一緒に「自分らしく生きること」について考えていきます。

第1回 「理解しなくてもわりと平気」

「理解しないといけない」というプレッシャーが社会にあるようです。

でも、「理解できなくても人と会っていい」「わからない本も読んでいい」と私は思うのです。

私は、小説やエッセイを書いて本を売る仕事をしており、最近「本を読まない人が増えている」と聞いて気になっています。もちろん、無理して本を手にする必要はありません。ただ、実は本好きなのに、「僕は本が苦手」と思い込んでいる人もいるのではないのでしょうか。もしかしたら「文をすべて理解した後でない、次のページに移れない」という作業をしてしまっているからかもしれません。

私なんかは、わからなくてもページをめくります。めくりさえすれば読書です。

人に会うときも、そうなのではないでしょうか。

「人に会うときは、理解しなければならぬ」と思い込んで、会う前に相手の性別や属性を又聞きで手に入れたり、見た目から勝手な想像をしたり、「わかります、わかります」と適当な相槌を打ち続けたり、グループ分けをして「この性別のこの世代のこの職業の人だから、こういう話をしたら喜ばれるはず」と固定観念を押し付けたりもしてしまいます。

もちろん、理解できるに越したことはないでしょう。けれども、理解してハードルが高いので、会うことさえ面倒になったり、あるいは、「分かる」というのは「分ける」につながるので、無駄にグループ化して人間を捉えて差別的になってしまったりもします。

実際のところは人間って性別や年齢ではないので、性別や年齢を知ったからって相手を理解はできないですね。

だから、人と会うときは、理解よりも、寛容になることの方が大事ではないでしょうか。

相手は人間である。ただ、会う。一緒に生きる。それだけでもいいのかもしれない。

とはいえ、私も、よく間違えます。差別的なことを思ってしまうのです。

この頃、メールのやり取りだけで仕事を進めることが増えました。相手の見た目や性別や年齢などがわからないまま、メー

ルの送受信を繰り返し、数ヶ月してからその人に会う、ということがあります。

あるとき、お名前の雰囲気から、私が勝手に「二十代の女性」の人物像を頭の中で作ってやり取りしていて、会って見たら「五十代の男性」だったということがありました。私は、「あ、それだったら、もうちょっと違う感じでメールを書けばよかったな」と、パッと思ってしまった。

いやいや、そんなわけではないですよ。相手がどんな性別であろうと何歳であろうと、文面は同じで良いのです。相手の属性にかかわらず、同じように丁寧に接するのが礼儀です。

性別や年齢を知らないことで、むしろ人の本質をつかめる、というときだってあります。

「この性別は、こういう性格」「この世代は、こういう世代」と知っておくことよりも、「違っても人間なんだ」と思うということの方が、多様性の実現への道につながっているのかもしれない。



山崎ナオコーラ
作家

1978年福岡生まれ、東京育ち。國學院大學文学部日本文学科卒業。2004年から小説やエッセイの発表を始める。最新刊は、現代のジェンダーや社会規範と照らし合わせて源氏物語を読むエッセイ『ミライの源氏物語』（淡交社）。目標は、「誰にでもわかる言葉で、誰にも書けない文章を書きたい」。

フレンテスタッフコラム 4回シリーズ

“女性と政治”についての気になるあれこれ

第1回

女性と政治について、ふと思うこと

もしあなたに女の子のお子さんやお孫さんがいたとして、その子に「大きくなったらソウリデザインになる!」と言われたら、どのように返事しますか?

その子がまだ保育園など小さい頃なら「すごいね!」「がんばってね!」と声をかけるかもしれません。でももし大人になったその子から政治家になると告げられたとしたら、どうですか? 「大変だからやめておけば?」「そういうことは男の人が…」あるいは「なに言ってるの笑」と茶化したり「そんなことより早く結婚して幸せな家庭を…」なんて言ったりしてしまう方もいるかもしれません。

政治を現実の職業として感じると、“距離をとらせよう”とする力が働きます。特に女性に対して強めに働くこの力の背景にあるのが、政治は(リーダーは)男性が担うものという固定観念、「ジェンダーバイアス(社会的・文化的につくられた性別による偏見)」です。残念ながら、政治に関わろうとする女性はまだまだどうしてか奇異の目で見られがち。

女性が政治家をめざす上で最初に立ちはかかる“壁”は、「近くにいる人の反対」だと言われています。私たちはこれまで、(良かれと思って)どれだけの芽を、才能を摘んできたのでしょうか。

もちろん、政治の世界は決して易しいものではありません。難しい課題や意見の相違に直面し、批判や攻撃にさらされることもあるでしょう。男性優位の世界で大切な人が辛い思いをしないよう、関わらせないようにして護ろうとするのも自然なこと。

しかし、政治は議論によって社会のルールを決める場所です。もともと多様な人々が暮らしている町だからこそルールづくりの場も多様でなければならないはずなのに、政治の世界が高齢男性ばかりでは多様な住民の多様な声が充分“代弁”されているとは言えません。

女性をはじめ、若者やマイノリティと言われる立場の人たちが政治に関わることは、その町で暮らす多くの人々の生活や未来をより良く変えていくために必要な、とても重要で尊いことです。政治に多様性が生まれ、異なる視点で議論が深まることで政策に新たな価値が生まれ、「置き去りにされる」人を減らすことができます。

子どもたちに多様な価値観が認められる豊かな町を残していくためにも、困難を承知でそこに熱い想いや希望を抱く女性たちのことを、周りにいる私たちは“距離をとらせて”護るのではなく、もっと誇らしく思いながら違う護り方をしていく方がよいのではないのでしょうか。

今年春の統一地方選挙では全国的に「女性の風」が吹き、多くの女性首長、議員が誕生しました。

私たちは、変わろうとしています。でもまだまだです。

この風を止ませることなく、さらにより多くの町に届けていきませんか。清々しく。



このコーナーでは、「女性と政治」について感じることを、両者の距離を縮めるために必要な意識や知識について、4回にわたってつぶやいてまいります。ゆっくりお付き合いください!

フレンテみえって、なに?

三重県の男女共同参画社会を推進する拠点施設として津市の三重県総合文化センター内に平成6年オープン。情報発信・研修学習・相談・調査研究・参画交流および人材育成の「6本の柱」で、様々な事業を展開しています。ぜひ皆さま、お気軽にお立ち寄りください!

～詳しい情報はホームページまで～

フレンテみえ



休館日 毎週月曜日 年末年始 (12月29日から1月3日まで)

交通 ■バス/津駅西口1番のりばから約5分 ■徒歩/津駅西口から約25分 ■自家用車/伊勢自動車道芸濃インターから約15分、津インターから約10分 ※駐車場は1400台(無料)。できるだけ公共の交通機関をご利用ください。

発行 三重県総合文化センター 三重県男女共同参画センター フレンテみえ 〒514-0061 三重県津市一身田上津部田1234番地 TEL:059-233-1130 FAX:059-233-1135 URL https://www.center-mie.or.jp/frente/ E-mail: frente@center-mie.or.jp

生き方・家族・人間関係・離婚・職場 などなど… 男女がともに自分らしく生きるために、様々な悩みの相談をお受けします

女性のための電話相談 秘密厳守・相談無料

フレンテみえ相談室 専用ダイヤル 059-233-1133

相談時間	曜日	月	火	水	木	金	土	日
朝 9:00~12:00	休館日	●	●	●	●	●	●	●
昼 13:00~15:30	休館日	●	—	—	●	●	●	●
夜 17:00~19:00	※	—	—	●	—	—	—	—

※祝日の場合「朝・昼」相談あり(翌平日が休館日)

フレンテみえ相談室のご案内 (切り取ってご利用ください)

*このほか、女性のための面接相談・法律相談・心理相談と、男性のための電話相談「みえ」にしろ相談を実施中。詳しくはお問合せください。



再生紙を使用しています。